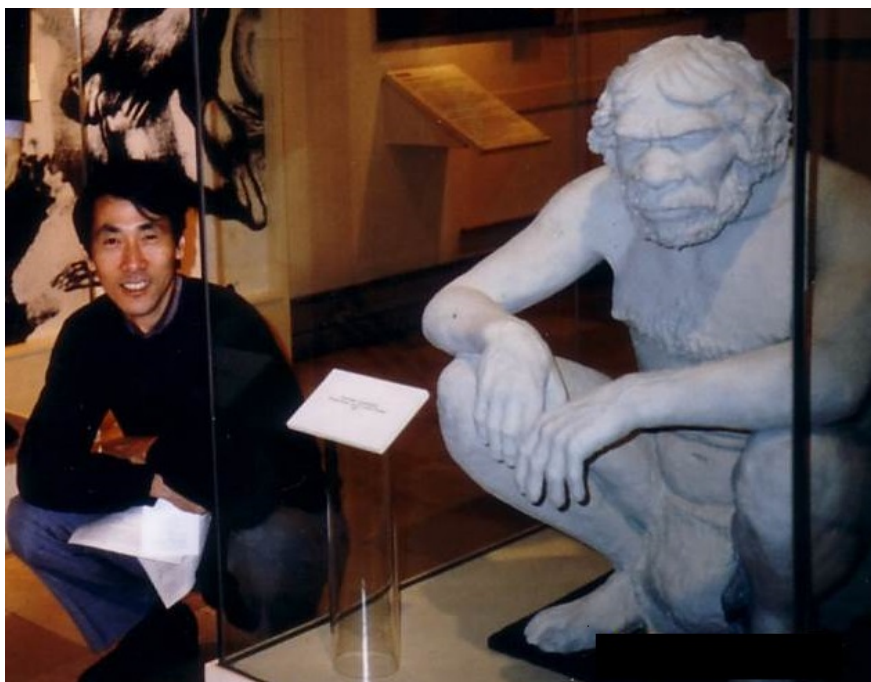


タイトル：21世紀のホモ・サピエンス

（原始のホモ・サピエンスに、ヒトのあるべき姿を視る）



右側がネアンデルタール人の像、左側が現代のホモ・サピエンス（ドイツ、ネアンデルタールにて）

目次

はじめに

第1章 食欲——飽食と飢餓の時代	p.6
第2章 性欲——愛を無くした性、性を無くした愛の時代	p.15
第3章 協力欲——帰属集団を見失った時代	p.27
第4章 家族の絆——人々は昔のような温かい一家団らんを取り戻せるのか	p.36
<hr/>	
第5章 階層化——貧富の差に悩まされる社会	p.47
第6章 貨幣の功罪——マネーに翻弄される経済	p.58
第7章 グローバリゼーション——効率化の波に洗われる世界	p.69
<hr/>	
第8章 人々の不満と不安——ヒトの本性と社会の狭間で悩む人々	p.78
<hr/>	
第9章 宇宙開発——新たなフロンティアを目指す火星探査機	p.90
第10章 学問の融合——社会生物学による人間の再復興	p.95
第11章 幸せ——人と社会の幸せを目指して	p.107
結語	p.114
<hr/>	
地球の歴史と生物進化の概略表	p.117
本対談の要約——さらなる勉強のために	p.120
主な参考文献	p.125
あとがき	p.126
執筆者略歴	

はじめに（現代の人間疎外）

19世紀産業革命が実りをもたらし、先進各国で資本主義（競争主義）に基づく産業の興隆、富の蓄積、海外進出が盛んになった。国内では、貧富による階層化／格差社会に多くの人々は悲惨な生活を余儀なくされた。その階層化がそのまま植民地として、国の間に格差を生み、植民地の人々は、虐げられた生活を送った。経済についても、アダム・スミスの“見えざる手”を信じて、自由競争に任され、敗者はやはり悲惨な運命を甘受せざるを得ず、かつ国内外の経済活動の好不況の波が制御されないまま人々を翻弄していた。そうした状況を憂い、人々が幸福を享受できる世界（人類）の社会組織体制を求めて、多くの思想家が提案をした。その最たるものがマルクスの共産主義であろう。第一次世界大戦時のロシア崩壊、ソビエト連邦誕生に結実したのである。しかし、あまり知られていないかもしれないが、この時期共産主義の全体主義的傾向を指摘し、対案として原価償却する貨幣という意味で、自由貨幣という考え方を提案したゲゼル（Gesell, Silvio 1862-1930. 彼の思想の詳細は主に「第6章 貨幣の功罪」で述べる）のような人もいたのである。いずれにしても、各国の自由競争主義（帝国主義）の結果が、20世紀に入ってから第一次世界大戦、さらには世界恐慌の後の第二次世界大戦に現れたと見られている。世界恐慌に対処するため、経済活動の理論がケインズの修正資本主義として提案され、政府の経済活動への参加／コントロールの重要性が認識されるようになった。戦後、戦争行為への反省の下、特に日本やドイツの復興努力、経済発展が注目された。科学技術の重要性が認識され、世界の経済発展に大きく貢献した。相対性理論、量子力学の確立は画期的な出来事であった。20世紀が物理の時代と言われる素を作ったと言えるだろう。その後1953年のワトソン／クリックによるDNAの二重らせん構造の発見により、分子生物学が興り、生命現象を分子のレベルで理解する学問分野が大きな発展をしつつある。それが故に、21世紀は生命科学の時代と期待されている。しかし、20世紀の間に修正資本主義による経済発展があったものの、ソ連崩壊、イスラムの台頭、南北問題、さらには環境汚染、CO₂問題など、世界のそして人類の将来に対する不安、脅威が日増しに顕れている。日本では、皆さんご存じのように、戦後の所得倍増、追いつけ追い越せの経済活動、世界の中での生産工場化、バブル経済、そしてバブル崩壊後の長い経済停滞を経験している。そして今、中国がその日本に取って代わろうとしている。未だに世界の各国内や各国間の競争主義のお陰で、アメリカのグローバリゼーションの波に洗われ、国内の格差社会化、各国間の格差拡大という世界人類にとって厳しい状況が続いている。

21世紀になってからも、9.11事件、イラク侵攻、リーマン・ショック、日本では東日本大震災などがあり、つい最近でも世界同時株安、欧米の経済破綻間近など世界人類が破綻に瀕しているように見受けられる。一億総中流と言われ、国民皆が豊かになったと自負していた日本でも、小泉純一郎政権（2001-2006）下で行われた一連の政治・経済構造改革以来、人々は大きな格差に悩み、不特定多数の中で孤立感を深め、自立した自己を見失いつつある。そんなとき、各個人は、ヒト（自分）はどのように生まれ、どのような生き方をするのが幸せなのか、ヒト（自分）は生きる価値があるのだろうか、と心に不安を抱くようになっていく。生きにくい世の中、なぜ生きているのか分からなくなっていく世の中になり

つつあるように思える。(居心地の悪い思いで生きているように見受けられる。つまり、この自由競争社会という制度にどこか違和感を持ちつつ生きているのではないだろうか。)そういう世の中で、生きる意味を模索しようという試みがいくつかの本になっている。以前は哲学や宗教にその種の答えを期待していたが、最近では、万人に認められる答えが提案できないように見受けられる。そして、今の世の中の価値観が問い直されており、本当の幸せとは何か、ここで一度確立し直さなければならないと、テレビのコメンテーターも度々指摘する。そこまでは誰も感じていることだろう。しかし、その本当の幸せに至るべき手がかり、原理原則についてはほとんど聴いたことがない。また、ある著者らは欲望の解放を提唱している。ダマシオという大脳生理学者は外部・内部環境からのすべての情報を統合した感情に素直に従った、ある意味で欲望に従った行動を幸せだと提唱している。しかし、どんな欲望なのか、どんな感情が素直な感情なのか、ということが触れられていない。筆者は浅学にして、これまでのところ、動物であるヒトを自然科学の知識を土台にして理解し、その理解を基にして社会を営む人間のあり方を問い直し、なぜ生きているのかという問いに対する答えを模索しようとする試み(つまり、ヒトの本性に従った人々の素直な感情を、どんな社会組織体制が解放できるのかという提案)にほとんど出会ったことがなく、不思議に思っている。

生命科学が発展し、進化の様子も明らかになりつつある昨今、社会科学をもその自然科学的知識を基に解析し直すことにより、ヒトの本性やあり方が見えてきつつあると思う。その見えてきたあり方を是非紹介したい。まずは、ヒトの本性に従った素直な感情、または欲望とはどんなものだと考えられるかを検討してみたい。これは動物の進化、ヒトの進化を学ぶことにより、今や海外の研究者によりいくつかの本で提案されている。ヒトとは、端的には動物であり、その直近の祖先がチンパンジーであったうえに、ヒトに進化する段階で協調性を獲得したと考えるよさそうである。つまりヒトらしいとは、各構成員を認識できる範囲である50人規模の協調性と言えることを示したい。そして、そのヒトらしい欲望=素直な感情を解放するための社会組織体制を提案できればと思う。先に問題提起した格差社会などの克服を目指した集団のあり方・組織体制を考える上で、経済理論や生態学・進化理論などでも用いられる「囚人のジレンマ」というゲーム理論を道具として頻繁に用いた。その中でも特に、現地球資源の枯渇環境を念頭において、制限環境下と無制限環境下の行動様式を比較利用した。そして、提案したい社会組織体制の基本は、50人規模の直接民主制であろうと予想した。昔の村社会がそれに当たるのかもしれない。当然、現代社会は、分業の確立により効率のよい社会になっている以上、50人規模程度の直接民主体制などはあり得ないのかもしれない。つまり、ヒトの本性に従った社会組織体制の理想については、筆者の能力不足のため、確固たる具体的な提案ができないでいる。具体的な提案のためには、社会・人文科学者のご協力を仰ぎたい。まずは、5,000人規模の地方分権の自治村が基本ではなかろうかと仮に考えてはいる。いずれにしても、地方分権、自由の保障(博愛行動についても自由である)、そして機会の平等が原則である。できれば、自由競争をいくらか制限できる、部分的な自給自足体制を整えるべきだと考えている。そのため、集団は50人規模以下に抑え、ゲゼルの提案のように自由地・自由貨幣を導入、むしろ逆金利にする。情報の共有のため、ネットワークの充実・保障、そして社会組織としては実は

インターネットのシステムをまねた政治システムの構築を提案できないかと思ったりしていた。

このようなことを、定年後、生命学者から人類への提言としてまとめようと考えていた矢先、最近(2012年)の中東の動揺、北アフリカ諸国の市民革命的な政権交代、ギリシャ危機、アメリカでのネット呼びかけによる格差社会是正への市民デモのニュースに出逢い、できるだけ早い機会に、生命科学からの見方・情報として提案したくなった。日頃このような議題(生物の進化、ヒトの進化、幸せ、本性など)で議論し、教えを受けている本学薬学部の増保さんにご協力頂き、対談形式でできるだけ早めにまとめ上げようと考えた。山登はずっと大学の教員できたが、増保さんは大学院のあと企業に長く勤められ、約10年前に東京理科大学薬学部の教員になられたので、産業界その他広い経験をお持ちで、本対談のネタもほとんど増保さんに教えて頂いたことに由来している。練られていない部分もあるかもしれないが、二人が同意する基本は貫いたつもりである。ただ、二人の生命科学研究者が、大胆にも進化や経済、社会、歴史までも対象として議論したため、思い違いや誤りも多々あると思われ、その点ご容赦願いたい。専門家諸氏のご指摘を請い願う。そして、今後の人類を考えるうえで、またご自身の人生を考える上で、参考にして頂けると大変嬉しく思う。

1-4章はヒト個々人の欲望(食、性、協調性)と家族について、5-7章は社会の問題として貧富、マネー、グローバル化を取り上げ、8章では競争社会の中で生きる個人の心の問題を、そしてその解決のための取り組みとして9章宇宙開発の可能性、10章将来求められる学問像、11章ヒトの幸せを達成するための提案という構成にした。11章の提案では、具体的な社会組織体制として部分的な自給自足圏の確立を提案した。また、そうした理解を助けるために、理系人間が好きな数式化の一種、幸せ関数なるものを考案し、8章図3に提案した。各章では、はじめに現代の問題点を取り上げ、次にそれらの由来をヒト誕生の頃からの進化や歴史に温ね、最後にその知識を基に将来あるべき姿を提案するというスタイルをとった。

注：対談中、「ヒト」は一つの動物種としての人類を意味し、その中で現代の人類と同じ種であるヒトを「ホモ・サピエンス」と呼ぶことにしている。(山登)

今2014年10月、初版から1年が経過した。この間いろいろあった。最近の御嶽山噴火、エボラ出血熱など。ますます地球が軋みだしているようである。最たるものが「イスラム国」、8章で議論する加藤智大に通じると感じている。若者は、自らを、周りから見て特別な恵まれた環境に置くより、地球上で苦しんでいる多くの人々に共感し、彼らと対等の立場に(フェアに)身を置き、ある意味寄り添いたいと無意識に願っているように思える。だから、巷でよく言われるように、上昇志向を潔しとせず、下流志向を選択するのだと解釈してみたい。さらに今年3月、初版を読んで下さった方から生命科学に依拠した人文科学の論考、例えば『生と権力の哲学』檜垣立哉、ちくま新書、筑摩書房(2006年出版)などを紹介して頂いた。フーコーの生権力、生政治学が発端であり、権力構造や政治に関し目を開かれた思いである。二人で権力構造についても対談したいと話していたが、その方面に見識も無く、結局対談しないまま

終わっていた。本来追加の章を設けるべきであろうが、時間も見識も乏しく、今回は初版の簡単な改訂で済ませることにした。ただ、従来の権力は人々の「外」に存在し、その明確な敵に対する「抵抗」も明確であったのに対し、今や権力が「内」に取り込まれ、お互いが監視し合う管理＝コントロール社会になったと捉えている点、「イスラム国」出現をうまく説明すると認識を新たにした。つまり、従来は国の間での戦争や紛争であり、権力構造が明確で国家間交渉が意味を持ったのに対し、「イスラム国」は国家とは呼べず、交渉の術が無くなっている初めてのケースであろう。このような権力構造は、本対談でもよく議論したように、個が消え、お互いで締め付け合うような束縛社会の中で孤立し、しあわせを減衰させてしまうことに繋がるはずである。そして多くの人々が、協調性の代替指標である金銭・名誉・権力の獲得に積極的に努力できないのは、薄々または無意識に、結局この社会で協調的な「正義」を目的とする活動をしたとしても、それがこの体制を補強してしまうだけであり、抵抗になり得ないことを感じているからかもしれない。しかし、逆に今や、少し前のような「外部」権力はあり得ず、すべてが「内部」に取り込まれた状態になってしまった、素晴らしい時代と把握してもいいのではないか。そんな＜生政治＞状況では、やはり本対談にあるように、もう一度「内部」を構成する個々人がホモ・サピエンスの本性に戻り、ヒトらしい生活をする事から、現逼塞状況打破の糸口が見えてくるのではないだろうか。